

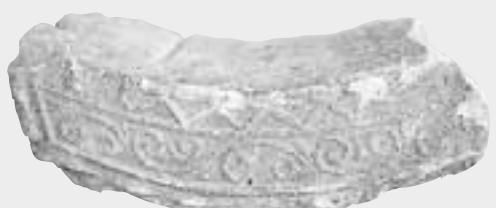
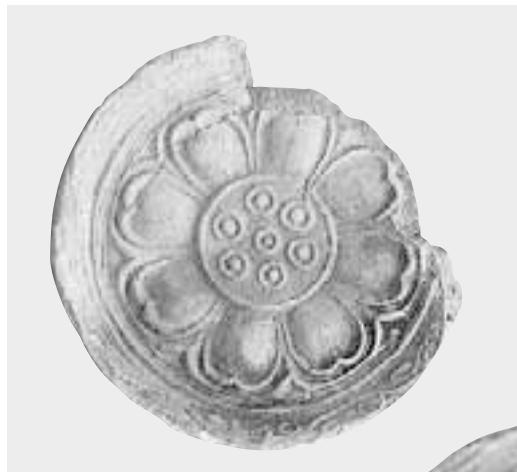
かいづか文化財だより



TEMPUS

テ ン プ ス

1999年 **7号**



貝塚市指定文化財を指定

－吉祥園寺十六羅漢画像など5件－

貝塚市教育委員会では、9月20日付けで、貝塚市文化財保護条例による貝塚市の文化財を指定いたしました。今回指定したのは、美術工芸(彫刻・絵画)では孝恩寺持国天立像、吉祥園寺十六羅漢画像、考古資料では秦廢寺出土瓦、橋本遺跡出土青磁、澱池遺跡出土の貨泉です。市の文化財指定につきましては、各種調査の成果に基づき、今後も年次的に進め、保護・活用をはかってまいります。みなさまのご理解・ご協力をお願いいたします。

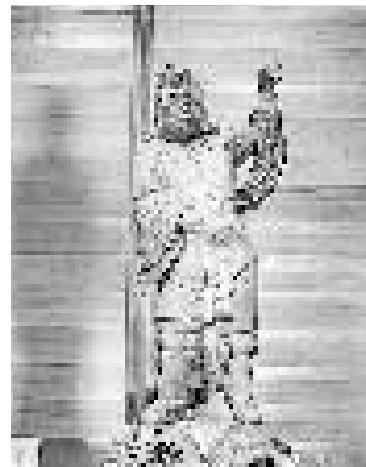
彫　刻

■孝恩寺木造持国天立像

1躯 像高142.4cm 平安前期(9世紀)

木積の孝恩寺は、奈良時代に行基が開創したと伝わる古刹です。根来騒乱により伽藍や持仏の大部分が焼失しましたが、残された觀音堂(釣無堂)は国宝に、平安期の仏像19体、板絵1点は重要文化財に指定されています。

持国天立像は一本木造で材質はカヤ材と考えられています。等身大に近い大きさで、当初は彩色が施されていたようです。右上腕は欠落していますが、全体に太く奥行きのある印象や、太い眉に大きな彫眼などの特徴から9世紀の作と考えられます。



絵　画

■吉祥園寺十六羅漢画像

16幅 軸装(絹本着色) 鎌倉時代

(附)釈迦三尊画像 3幅 軸装(絹本着色) 南北朝時代

吉祥園寺縁起 1巻 巻子装(紙本着色) 江戸時代

吉祥園寺は白鳳時代の創建と伝えられています。鎌倉時代に栄え、藤原定家の「後鳥羽院熊野御幸記」には吉祥音寺の名で登場します。

仏法では、十六羅漢は釈迦の教えを守り伝える使命をもつとされています。吉祥園寺の画像は、大和絵系のものとしては全国で現存する最古の部類に属します。保存状態が良好でないものもありますが、16幅がそろっており貴重なものです。

なお、現在は堺市博物館に寄託されています。



考古資料

■秦廃寺出土瓦

鬼 瓦	1点	32.2cm×36.2cm	奈良時代	麻生川 勝氏 藏
軒 丸 瓦	1点	直径16.9cm	奈良時代	同
(附) 同出土瓦片				
軒丸瓦片	12点		飛鳥時代～奈良時代	同
軒平瓦片	14点		飛鳥時代～奈良時代	同

秦廃寺は、7世紀後半～8世紀初頭に造営された秦氏の氏族寺院で本市最古の寺院と言えます。

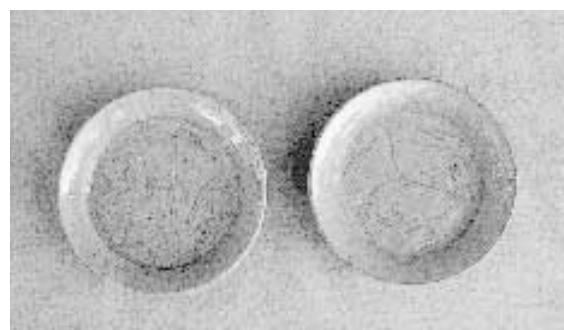
今回指定の出土瓦は、昭和初期に半田集落の南部の田より発見されたものです。鬼瓦は、2片に割れ、右下部が欠落しているもののその他の原型はよくとどめています。厚さ約5cmの粘土版に顔面を突出させて表したもので、淡黄灰色で硬質に仕上げられています。奈良時代後半に作られたものです。軒丸瓦は黒灰色で八弁単弁蓮華文、外縁に唐草文をめぐらす様式です。「池田寺式」と呼ばれる泉州独特の様式で7世紀末～8世紀初頭に作られたものです。瓦片にはいくつかの様式が認められ、秦廃寺の実態を解明するうえで貴重なものです。

■橋本遺跡出土青磁碗・皿

碗	1点	口径16.0cm	器高7.7cm	鎌倉時代
皿	2点	口径10.5cm	器高2.2cm	鎌倉時代

橋本共同墓地は、奈良時代に行基が設置したと伝わる古い墓地で、中世以降も近義荘の惣墓とされていたようです。

この青磁器は、昭和26年に市立斎場が建設された際に発見されたもので、鎌倉時代に中国から輸入されたものです。どちらも灰緑色の釉薬がかかり、完全な形を残しています。かなり身分の高い人物の副葬品であったと考えられます。



■濱池遺跡出土貨泉

1点 直径2.3cm 弥生時代

沢の濱池遺跡からは、古代から中世にかけての建物跡や中世の遺物が出土しています。貨泉は、中国の「新」時代（紀元8年～23年）の紀元14年から鋳造が始まられた貨幣で、日本では、これまで50点あまりが、弥生時代中期末～後期の遺跡から発見されています。濱池では中世に他所から搬入されたものと考えられています。



発掘調査からみた秦廃寺

1. 市内出土の飛鳥時代の瓦

古い時代の遺跡を発掘すると屋根瓦はあまり出土しません。それはなぜでしょうか？江戸時代に大火事が多くなり、徳川幕府が防火のために瓦を広く奨励するまでは、民家で瓦を使うことは一般的でなかったからです。

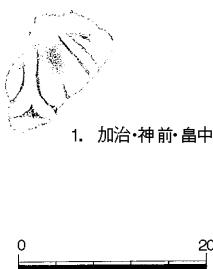
瓦は、日本に仏教が伝わって、お寺を建立（こんりゅう）する技術の一つとして朝鮮半島からもたらされました。それまで日本には屋根瓦はなく、当時は最先端技術・ハイテクだったのです。図に示した瓦は、加治・神前・畠中遺跡、堀遺跡、地蔵堂遺跡の発掘調査で1点づつ出土したものです。飛鳥時代（7世紀）の瓦で、屋根の軒先に使う丸瓦で文様が付けられています。考古学の用語では「素弁蓮花文軒丸瓦（そべんれんげもんのきまるがわら）」といいます。奈良県明日香村にあった豊浦寺（とゆらでら）に使われた瓦と同じ文様なので、「豊浦寺式」ともいいます。蓮の花を図案化し、花弁にあたる部分を八重ではなく単弁で表現し、簡素ですが優雅な文様を施しています。和泉地域の出土瓦では最も古く、大阪府下でも最古級です。

これらの瓦をどう理解するかこれまで困っていました。それぞれの調査ではお寺を考えるような建物跡などありません。後の時代の地層から土器などに

混じって瓦が1点出土しただけなのです。その場所にお寺があったことは考えられませんでした。でも、最古級の瓦が貝塚市に3ヶ所も出土することは特別なことであり、市内のどこかにお寺があったと考えていました。

これらの瓦に最も時代の近いお寺としては、白鳳時代（飛鳥時代終わり頃から奈良時代始め）に創建（そうけん）されたと考えられていた秦廃寺があります。平成8年度に大阪府教育委員会によって実施された秦廃寺、麻生中下代遺跡（貝塚市半田、麻生中）の発掘調査では同じ形の瓦が2点出土しました。秦廃寺の建立でこれらの瓦が使われ、白鳳時代以前に創建されたことが分かったのです。また、その門前には、お寺に関わった工人集団の村も見つかり、これらの瓦が当地で作られた可能性が出てきました。

では、3遺跡の瓦は、どのような方法で秦廃寺からそれぞれの遺跡に持ち込まれたのでしょうか。一つの理由としては農地開発に伴う工事による移動が考えられます。秦廃寺ではこれらの瓦が使われなくなり、土の中に埋まったようです。本市では13世紀に大きな農地開発が開始され、切り土・盛り土がされました。この工事の時に秦廃寺から土に混じって瓦がまず運ばれます。その後の工事や河川の氾濫などによって、遺跡の土の中に埋まったのでしょう。



1. 加治・神前・畠中遺跡出土

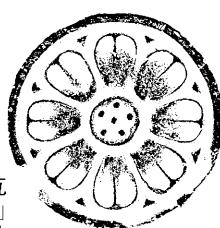


2. 地蔵堂遺跡出土



3. 堀遺跡出土

素弁八葉蓮華文軒丸瓦
〔秦廃寺・麻生中下代遺跡発掘調査概要〕
大阪府教育委員会より



2. 半田遺跡の発掘調査と秦廃寺

平成11年2月に府道和泉泉南線（通称13号線）半田交差点の東側で発掘調査をしました。幅10mはありそうな川跡を見つけたところ中から奈良時代中頃（8世紀中頃）の食器や水甕がたくさん出てきました。須恵器と呼ばれている土器で、灰色の比較的固い焼き物です。観察するほとんどの摩滅していないので、遠くから流されてきたものではなく、近くの集落に住んでいた人々がいらなくなったり日用品などを捨てたのでしょう。当時、この付近には田畠が広がっていたと考えられ、川の水を利用していただのようです。

奈良時代後半には、川が埋まってしまったようで、幅60cmくらいの水路が作られていました。何回も掘りなおされて使われていたらしく、当時の人たちが水を取るために苦労していた様子が解ります。また、一辺40cmの方形の穴を掘り直径15cm位の柱を立てて埋め戻した柱穴が2つ見つかりました。当時の人たちが住んでいた家でしょう。どのような構造の建物であったかはよく解りませんが、当時の家は土中に柱を直接埋めていました。ただ、深さが20cmと浅いことから、当時の地表面を後の時代の人々が20cm以上は削ってしまっているようです。柱や柱穴は比較的小さく、一般の人々が暮らしていたのでしょう。



貝塚市半田、JR阪和線東貝塚駅より南へ歩いて10分ほどどの府営半田住宅付近には、渡来系氏族である秦勝賀佐枝によって建てられた秦寺がありました。親戚の秦河勝は弥勒菩薩で有名な京都太秦の広隆寺を建立しています。同寺所蔵の「広隆寺末寺并別院記」には天武天皇八年(680年)十一月に秦寺の記録が残されています。

平成8年度に大阪府教育委員会は府営住宅を建て替えるために発掘調査をしました。この時、調査区の北端で人為的に削られた段状部分が発見されました。これが秦寺の南端にあたるようです。さらに、秦寺創建前(7世紀前半～中葉)の竪穴住居跡9棟、創建後(7世紀後半～8世紀前半)の掘立柱建物11棟以上が発見されました。竪穴住居跡は、建物の時期と平瓦と同じ手法で作られた竈(かまど)がでてきたことから、寺の建築に携わった工人たちが暮らしていたのでしょうか。掘立柱建物の柱穴は一辺90cmの四角形で、その穴に直径30cmの丸い柱を立てていました。建物は

数回建て替えられていたので、長い間暮らしていたことが解りました。おそらく寺を建立した秦氏一族の邸宅であったと想像されます。

これまでの発掘調査で、秦寺のまわりのことが少しづつ解ってきました。平成10年度の半田遺跡の調査では8世紀前半から9世紀中頃の建物跡をたくさん発見しました、秦寺が建てられた後の9世紀中頃には寺の南にあった集落が寺の東南に移りながら拡がっていました。その理由は、秦寺の東に中世に熊野詣で栄えた熊野街道が通っており、その前身となる古道が在ったからだと思われます。

今回、半田遺跡で発見した9世紀中頃の建物跡は秦寺を中心として集落が広がっていく中で、これまで田畠や水路であった場所も宅地化が進んだことを物語るものでしょう。秦寺周辺は近隣から多くの人々が集まり、門前町のような賑わいであったと想像されます。



地域とともに歩んだ蕎原小学校

－昭和40年の運動場拡張工事から－



郷土資料室では、去る5月29日から7月26日まで、「回想 蕎原小学校 - 村とともに125年 -」と題して、平成10年3月をもってその歴史に幕を閉じた蕎原小学校のあゆみを振り返る展示を郷土資料展示室において開催しました。その展示の際にも、蕎原小学校を地域とともに歩んできた小学校として紹介しましたが、今回はこの誌面を借りて、そうした事例の一つである昭和40年の運動場拡張工事を紹介します。

最初に、昭和34年11月24日、貝塚市立蕎原小学校校長・貝塚市蕎原自治振興会長・蕎原小学校PTA会長の連名で貝塚市教育委員会に提出された、「蕎原小学校運動場拡張並びに山の家建設とプール設置の件について」と題された請願書を紹介します。この請願は、表題にも記されているように、ただ単に運動場の拡張を請願したものではなく、“山の家建設とプール設置”をその主たる目的としたものでした。山の家は、昭和26年8月から蕎原小学校で行なわれてきた市内小中学校の林間学舎ですが、当時の施設は生徒数の多い市内小中学校の児童を収容するにはかなり狭かったようです。そのため、その増設をしたいと考えているとあります。また、プール設置については、林間学校で使う水の確保が目的でした。当時の林間学校には水道施設が整備されていなかったため、風呂などに使う水の確保には遠くの川まで水を汲みに行っていました。そのため、そうした負担を軽減するのが目的でプール設置の請願がなされました。そして、こうした施設の建設場所を確保するために運動場の拡張をしてほしいとあります。なお、運動場拡張の用地については、地区におい

て山林420坪をすでに確保しているとあります。このように、この運動場拡張の請願は林間学校施設の充実という点で、蕎原小学校の生徒だけではなく市内児童全体の利益を考慮したものでした。その後、市議会で受理されたようで、その通知書も残っています。

さて、資料がないため、その後の詳しい経過は不明ですが、昭和39年10月30日に地元住民による校地拡張委員会が結成され、翌年8月17日には市議会で議決され、同年8月30日に拡張工事に着工しました。なお、工事の際には、森林伐採などを地元住民の手で行なったようで、その時の写真が残っています。そして、地元住民の熱心な運動と苦心の結果、同年10月31日に新運動場が完工しました。

11月には新運動場完工祝賀記念式典ならびに記念行事が実施され、功労者約30名が貝塚市長および教育委員会、蕎原小学校から感謝状を受けました。

以上、簡単に当時の経過を見てきましたが、ただ請願書を出すだけでなく、自分たちの力で工事を行なうという、蕎原・大川地区の人びとがもつ地域の学校への強い思いの一端を垣間見ることができ、蕎原小学校が地域とともに歩んできたことを示す事例の一つであろうと思います。残念ながら、蕎原小学校は平成10年3月をもって廃校となりましたが、こうした思いは子々孫々に伝えられていくことでしょう。そして、われわれもこうした教育への思いを忘れないものです。

なお、蕎原小学校の跡地は、来年度「そぶら貝塚ほの字の里」としてオープンする予定です。



古文書からわかる麻生郷地域

郷土資料室では、開室以来市内の古文書調査を行なっています。その中でも地域的にまとまって古文書の調査が進んでいるのが、麻生郷地域です。

麻生郷地域とは、昭和6年に合併した旧麻生郷村・旧島村の地域をさします。現在の大字では麻生中・海塚・久保・小瀬・津田・津田北町・津田南町・鳥羽・永吉・新井・半田・東・福田・堀にあたります。この地域では、すでに福田の福原家文書・麻生中の旧大矢家(義本家)文書が調査済みで、現在鳥羽の永橋家文書の調査を行なっているところです。これら調査の進められている史料を中心に、麻生郷地域の歴史について見てていきたいと思います。

麻生郷は鎌倉末期頃、木島郷から分かれて成立した郷であり、麻生氏一族がこの地域に台頭していたと考えられる記述が高野山文書などで確認できます。その後麻生郷は元弘元年(1331)に高野山丹生明神社に寄進され、さらに10年後の興国2年(1341)に松尾寺(現和泉市)に与えられたとされています。戦国時代には、幕府御料所であったと考えられます。織豊期は根来衆と信長・秀吉が対峙する最前線であり、秀吉によって根来衆が鎮められた後、直轄領となります。天正13年(1585)から岸和田藩の始まりとされる小出氏が入封し、元和5(1619)年に松井氏、寛永17年(1640)からは明治に至るまで岡部氏が代々藩主をつとめた岸和田藩領に含まれます。

麻生郷は、中世の莊園の系譜を引き、早くから開発の進められた地域です。近木川上流から下流に向かって開発が進み、中村・半田村・鳥



麻生井堰（取水口）

羽村が、次いで新井村などが集落を形成し、遅れて小瀬村・堀村が集落を形成したと考えられています。近世になって、麻生郷の枠組みは岸和田藩からの触書(命令)などを伝達する取りまとめの単位となったようです。麻生郷の村々が連合している事例として、一つに水利が挙げられます。近木川の麻生井堰より取水し、下流の村々が共同で管理しています。これには、水利の異なる永吉村と、近代の麻生郷村に入らなかつた上流の馬場・秬谷・大川・三ヶ山の村々は含まれていませんが、水利の異なる永吉村と上流の4ヶ村は含まれていませんが、水を取る順番や見張りの当番、水路の改修費用の分担などの取り決めが、当時の古文書から読み取れます。また、久保村の阿理莫神社は麻生郷の郷社であったようで、麻生郷内の村人は氏子として神社を守っていました。そうした費用の分担も村々で行なっていたようです。地域の結びつきの強さをうかがい知ることができます。

明治に入ってからは、麻生郷16ヶ村のうち下流の村々(島村を除く)は連合して「麻生郷村」となります。中世からの麻生郷という結びつきが600年後の現代までつながっているということに歴史の重みを感じます。

こうした歴史像は、地域に遺された古文書などの歴史資料の調査や埋蔵文化財の発掘成果によって、はじめて描き出すことが可能になります。どうか地域の歴史を掘り起こす古文書調査に今後ともご協力下さい。



麻生井

平成10年度貝塚市指定文化財一覧表

■彫刻

名 称	員数	構造・方量・規模	所 有 者	時 代
1. 孝恩寺 木造持国天立像	1	像高142.4cm	孝恩寺	平安前期(9世紀)

■絵画

名 称	員数	構造・方量・規模	所 有 者	時 代
1. 吉祥園寺 十六羅漢画像	16	軸装(絹本着色)	吉祥園寺	鎌倉時代
(附) 釈迦三尊画像	3	軸装(絹本着色)	々	南北朝時代
(附) 縁起	1	巻子装(紙本)	々	江戸時代

■考古資料

名 称	員数	構造・方量・規模	所 有 者	時 代
1. 泰庵寺出土瓦 (附) 同出土瓦片	2 26	鬼瓦 横32.2cm 縦36.2cm 軒丸瓦 直径16.9cm	麻生川 勝 々	奈良時代 飛鳥時代～奈良時代
2. 橋本遺跡出土 青磁碗・皿	3	碗 口径16.0cm 器高7.7cm 皿 口径10.5cm 器高2.2cm	貝塚市教育委員会	鎌倉時代
3. 澱池遺跡出土貨泉	1	直径2.3cm	貝塚市教育委員会	弥生時代

寺内町まちづくり連絡協議会 総会開催

寺内町の保存と活用を考えようと、関係市町により組織された「寺内町まちづくり連絡協議会」が発足してから3年目を迎えます。7月22日に、願泉寺にて今年度の総会が行われました。その場で、今後の協議会活動として、寺内町の紹介パネルの作成やホームページの開設、会員拡大のための各地訪問などに取り組んでいくことが決まりました。ご期待ください。

編集後記

テンプス第7号は「泰庵寺の瓦」が貝塚市指定文化財に指定されたことをきっかけに、出土地である「麻生郷地域」を中心に取り上げてみました。地域の歴史は考古学、文献など様々な分野から考えていく必要がありますが、「麻生郷地域」は調査によって、比較的的分野の資料が整っている地域です。まだまだ断片的ではありますが、今回のように考古学、文献などからそれぞれの地域の歴史を復元する作業をつづけ、やがて貝塚市全体の歴史をみなさん伝えられることができればと思います。



かいづか文化財だよりテンプス7号

平成11年10月31日発行

貝塚市教育委員会

〒597-8585 貝塚市畠中1丁目17-1

☎ (0724) 23-2151

印刷 (株)中島弘文堂印刷所

※テンプスとはラテン語で時を意味します